【ポスター発表】

相談援助実習における実習指導者からの「講評」の分析

-テキストマイニングを用いた概念整理-

○群馬医療福祉大学　宮本　雅央（06674）

静岡福祉大学　鈴木　政史（05689）

キーワード：社会福祉士　相談援助実習　実習指導者

１．研 究 目 的

平成 19 年 12 月 5 日に「社会福祉士及び介護福祉士法等の一部を改正する法律」（平成 19 年法律第 125 号）が公布され、社会福祉士養成課程における教育カリキュラムの見直しが行われた。特に「相談援助実習」においては、「週 1 回以上の定期的巡回指導」や「実習施設との十分な連携」など「実習生」「実習指導者」「実習担当教員」の三者関係、あるいは「クライエント」を含む四者関係が重要視されている。この実習四者関係は「実習指導者と実習担当教員の目的の共有を前提にした協力・連携を土台[1]」にしている。

そこで、本研究では社会福祉士養成課程における「相談援助実習（社会福祉援助技術現場実習）」の記録をテキストマイニングの手法を用いて分析し、「実習指導者」が「実習生」や「相談援助実習」に求める概念の傾向を抽出することを目的とした。延いては、実習指導での教育内容や実習プログラムのあり方、上述した三者（四者）関係のあり方についての示唆を得ることができるといえる。

２．研究の視点および方法

分析対象は、平成 22 年度に A 大学で相談援助実習（社会福祉援助技術現場実習）を実施した施設・機関の実習指導者が記入した「実習指導者の講評」という自由記述の質的データである。解析にあたっては、自由記述をテキストデータに変換しコード化した。コード化にあたって、個人名は仮名とし施設・機関名は種別へと変換した。なお、外部変数として「性別」「実習施設・機関種別」と「通所」「入所」区分、「高齢」「障害」「児童」「地域包括支援センター」「社会福祉協議会」「行政機関」「医療機関」の種別区分を設定した。また、テキストデータ（講評）は「KH Coder」を用いて形態素解析を行い、助詞、句読点などを除き、同種語を置換するためのコーディングルールを作成した。その後、対応分析を施し共起ネットワーク図を作成し結果を考察した。

３．倫理的配慮

本研究は､分析に際し施設･機関名や実習生の個人名についてのデータをコード化した。

[1] 日本社会福祉士養成校協会（2009）「相談援助実習指導・現場実習教員テキスト」　中央法規　86

また、データセット作成に際しても統計的処理を施し、個人名や施設・機関名等が特定できないよう配慮した。その他の倫理的配慮については、2010 年 4 月 1 日に施行された「一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理指針」を指針とし研究を遂行した。

４．研 究 結 果（詳細は当日資料を参照）

分析対象として、実習生 96 名分に対する記述を得、形態素解析の結果 1,556 語が抽出された。最も高い頻度で抽出された語は「実習（242)」であり、次いで「思う（225)」「利用者（113)」「積極（53)」等が抽出された（動詞を除く)。

抽出された語を基に共起ネットワーク（図 1）を作成しそれらの関連性を検討したところ､｢実習｣や｢思う｣を中心に「理解」や「見る」「感じる」「学ぶ」等の「実習体験からの発見」に関する領域が中核にあることが示された｡その領域を中心とし、「利用者」や「人」、実習生を示す「Aさん」､｢積極｣｢コミュニケーション」等、実習教育を構成する人員同士の「かかわり行動」に関する領域、「今後」「職員」「福祉」「期待」等の「実習生の将来への期待」に関する領域の二つの領域が関連の強いネットワークとして検出された。また、これら三つの領域の外縁に「考える」「行う」「現場」「必要」等の「実践や考察」に関する領域や、「支援」「視点」「課題」「記録」等の「記録等における支援の視点」に関する領域が検出された。

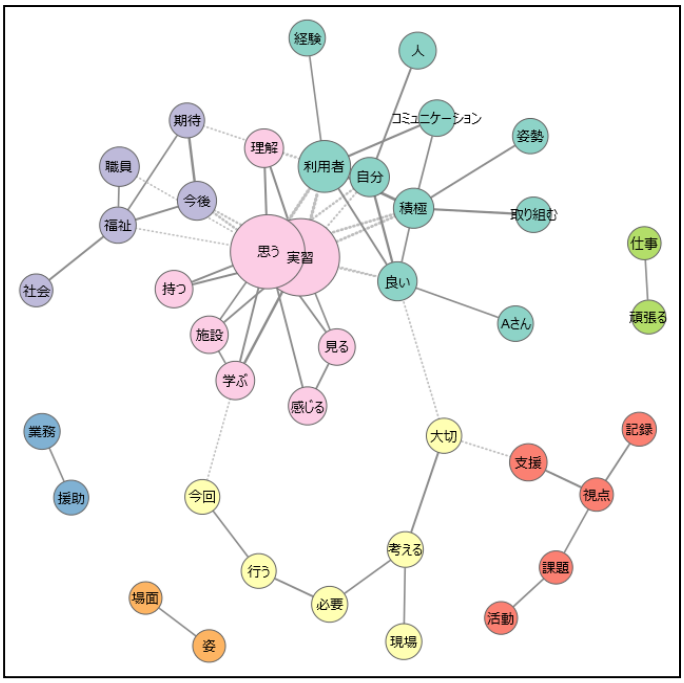

図１　共起ネットワーク図（modularity）

５．考 察

上記の結果から、本研究における対象者が講評として記述した内容は、実習生の体験を中核として関係者とのかかわりのあり方、実習生の将来への期待によって構成されていることが明らかになった。また、実習中の考察や現場での実践、それらを根拠づける支援の視点や記録等に代表される実習遂行能力についての領域が検出され、実習指導者はこれらの領域を重視している傾向も明らかとなった。これらの結果は、実習三者（四者）関係において共有すべき実習教育の目的のあり方、協力や連携の具体的方策について示唆を得ることができたといえる。ただし、今後も実習生の評価や実習プログラムの水準、実習指導者の属性等、影響が予測される要因を含めた詳細な検討が必要であることも示された。